

○事務局 こんばんは。お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

それでは、早速ですが、第4回目の高石市立幼稚園再編等検討委員会を開催させていただきます。

それでは、検討委員会設置要綱第6条第2項の規定によりまして、議事進行を大方委員長にお願いいたしたいと思います。よろしく申し上げます。

○大方委員長 はい、ありがとうございます。

それでは、進めさせていただきます。本日の議題は、議事1、事務局説明、高石市立幼稚園再編等計画（案）についてということで、まず事務局のほう、資料のご説明をお願いできますか。

○事務局 高石市立幼稚園再編等計画（案）という資料を配布させていただいてますが、そちらのほうをみていただけますでしょうか。

資料の内容につきましてご説明させていただきます。

本市におけます今後の幼児教育の方針ということでございまして、目標を掲げて大枠といたしますか、骨格部分について触れさせていただきます。前回の第3回目の検討委員会の中でも、こういった方針的な説明をさせていただきましたけども、それを若干精査させていただいたものでございます。

目標といたしましては、高石市の幼児教育の現状を認識した上で、公民役割分担しなごらの市立幼稚園再編等によりまして、教育上望ましい集団活動が実施できる教育環境を確保していきたいというのが大きな目標でございます。

それから、（1）の公民の役割分担でございますが、少子化が進んでいる状況の中、保護者のニーズもますます多様化している状況にあります。そういった中で、公立と私立の幼稚園につきまして、それぞれの特色を生かして保護者のニーズに合ったサービスを選択できるような役割分担をして、目的や機能の違いを踏まえながら施策の展開を進めていくということでございます。

公立幼稚園の役割につきましては、これまでは地域の子どもを地域で育てるということになっております。これまでも、これから以降も同様のことは、役割としては考えております。特に障がいを持っておられる子どもさんでありますとか、課題を抱える養育環境にある親子への教育支援というのが必要であります。これが公立幼稚園の役割というふうに考えております。

それから、子育ての環境も変化してまいっておりますので、そういった環境に的確に対

応するために、幼児教育センター的な機能、これは幼稚園だけではなしに、保育所でもそうだというふうに認識しておりますけれども、そういった機能を担う必要があるだろうというふうに思って、公立幼稚園の役割としては考えてございます。

それから、私立幼稚園の役割としましては、早い段階では3歳児保育の実現でありますとか、保護者のニーズに応じた特色のある講座ですとか、そういうことでの実践をされてこられております。それから、経営努力というものの中で多様な特色ある教育機会を提供していくと、そういったことが私立幼稚園の役割というふうに考えております。

そういった公民の役割分担ということを踏まえまして、次のページの(2)でございますが、市立幼稚園の適正規模及び適正配置についてという項目でございます。幼児教育のさらなる向上を目指して、教育上望ましい集団活動が実施できる教育環境を確保するために、市立幼稚園の再編によって適正な規模の市立幼稚園を適正に配置していくということでございます。

それから、再編後の通園手段をカバーするために、通園バスの導入についてということを検討すべきというふうに提言されておるわけでございますが、ここに書いてありますように、中学校区をベースに再編した場合につきましては、ほとんどの区域で徒歩での通園が可能と認められますので、この場合の通園バスの導入は不要であるというふうに考えております。理由を簡単に申し上げますと、取石幼稚園の再編でありますとか認定こども園、それから加茂の清高幼稚園の民営化に伴いまして、現在、市立の加茂幼稚園につきましては、もともとの加茂幼稚園の通園区域に加えまして、東側の取石幼稚園の通園区域、あるいは清高幼稚園の通園区域と、かなり広い通園区域になってございますが、直線距離にして一番幼稚園が遠いところになりますと、1.3キロほどございます。そういったところで、かなり時間がかかるかと思いますが、今の段階では徒歩もしくは自転車等での登園、通園をいただいているということですので、中学校区をベースに再編した場合には、それ以上遠くなることはないというふうに考えられますので、通園バスの導入は不要であるというふうに考えております。

それから、預かり保育等、3番目でございます。

3歳児保育につきましては、国の子ども・子育て新システムというものが国のほうで議論をされてございまして、そのシステムの行方、動向を注視しながら、そのシステムで言われております市町村でつくる新システム事業計画、仮称でございますが、こういった新システムに合わせた、市でつくる新システム事業計画の策定とあわせて、預かり保育や3

歳児保育については導入を図ってまいりたいというふうに考えてございます。

以上が、幼稚園再編等計画（案）ということで、高石市における今後の幼児教育の方針ということでございます。

次に、別に配付させていただいております高石市立幼稚園再編基準というのがあると思いますので、そちらの方をご覧いただきたいと思います。こちらのほうも再編基準の案ということで、第2回、第3回の検討委員会にわたっていろいろご議論いただいた中で、その結果を踏まえて精査したものでございます。

適正規模の基準でございますが、1クラスの下限はおおむね20名程度といたしますが、支援を要する園児増加への対応等を考慮し、弾力的な運用といたしたいということでございます。それから、可能な限り各年齢において複数学級を目指してまいりたいと思っております。

次に、2番目の適正配置の基準でございますが、園児の生活エリア及び通園時間、通園距離に配慮をしていきたい。それから、中学校区に配慮し、バランスのとれた配置とするということでございます。

それから、3番目の再編（統廃合）の基準でございますが、評価項目ごとに適正な配点を行った上で、総合的な評価によって再編が必要な市立幼稚園を抽出してまいりたいということでございます。それで、前回、案の段階では評価項目、8項目上げさせていただきました。その中で今回、2つ削除いたしましたのが、幼稚園の定員に対する就園率というもの、それと各幼稚園の耐震1次診断でのIs値というものを削除させていただきました。

理由を申し上げますと、この項目の1番に書いてございます通園区域内の人口に対する就園率というのを書かさせていただいておりますが、あくまで定員に対する就園率というのは、その通園区域、地域での公立幼稚園に対するニーズというものが反映されているかといいますと、そうではないというふうに考えてございまして、あくまで区域内に住んでおられる子どもさん方がどれくらい公立幼稚園に通っておられるかという、こういった就園率のほうが、的確に公立幼稚園に対するニーズが把握できるんじゃないかということで、こちらのほうを採用させていただいて、それなりに配点についても高目に設定させておるところでございます。それから、もう1点の耐震Is値でございますが、第1回目のときに申し上げたかと思いますが、第1次診断でのIs値が0.8以上あれば、地震によって倒壊する危険が少ないということでございますけれども、うちの幼稚園のIs値につきましては0.31から0.6までの間で、すべて0.8を下回っているということでございましたので、ここで

Is値でもって評価することは余り意味がないというふうに考えましたので、その分につきましては削除させていただきました。

それを順番に項目ごとに説明させていただきますと、まず1番目が、的確に公立幼稚園に対するニーズを把握しているという意味で、通園区域内の幼児人口に対する就園率、これを30%以上を25点、20%以上を15点、20%未満を5点とする配点を考えてございます。

それから、建築年数でございますが、これは建物老朽化でありますとか、今後の耐用年数を考慮した場合に、建築年数が新しいほど点数を高くしていくべきだといった判断をしましたので、30年以下につきましては15点、40年以下が10点、40年を超えるものについては5点という配点でさせていただきます。

それから、敷地面積につきましては、3,000平米以上は20点、それ未満は10点というふうな配点をさせていただきますが、これは子ども・子育て新システムを見据えた中で、総合施設といましてゼロ歳から5歳までの子どもさんを幼保一体化した、学校教育を提供していくスペースというものを想定することが新システムで提唱されておりますので、そういったものを実現していくためには、余りにも満たない敷地だとそれが困難だということでございますので、若干敷地の余裕のある保育室の拡張、増築ですとか給食室の増築、そういったものも考えられますので、敷地面積の大きなところに点数を大きく配分させていただきます。

それから、幼稚園と小学校の連携でございますが、これは位置関係、位置的な関係についてのみ配点させていただきたいと思っておりますけれども、隣接しているところにつきましては15点、比較的近いところにつきましては10点、若干離れているという場所については5点というふうに配点させていただいております。

それから、配置的なバランスということでございますが、バランスとしてすぐれているというのは、中学校区を中心に再編した場合に、その3園で地域のほとんどが徒歩圏内でカバーできるというような場所が一番適正な配置かなと考えてございますけれども、今回の中学校区を中心にして各中学校区内にあります市立幼稚園でのバランス、配置のバランスを考えた場合をもとに評価をさせていただきます。

それから、周辺環境についてでございますが、これは公立の幼稚園、市立幼稚園にとって適切な環境かどうかということではなしに、客観的にどういう環境に位置しているのだろうかということで評価させていただいております。後ほど結果だけ申し上げますけれども、そういった観点で、周辺環境につきましては評価させていただいております。

それから、次のページをめくっていただきたいと思いますが、今ご説明申し上げました幼稚園再編基準の配点方法に基づきまして評価した結果が表のとおりでございまして、高南中学校区につきましては、高石幼稚園と高陽幼稚園でございます。総合的なポイントで申し上げますと、高石幼稚園が40ポイント、高陽幼稚園が60ポイント。それから、高石中学校区で申し上げますと、羽衣幼稚園と北幼稚園がございまして、羽衣幼稚園が70ポイント、北幼稚園が50ポイント。それから、取石中学校区につきましては、加茂幼稚園しかございませんが、ポイントとしましては75ポイントという結果になってございます。

事務局から、再編等の計画及び再編基準、それから再編に基づく総合評価結果の説明については以上でございます。

○大方委員長 はい、ありがとうございます。

ご質問でございますでしょうか。この間ここで言っていたことで、資料にまとめてくださったのではないかと思います。3歳児のことも一応触れてくださって。

この公民の役割分担というものは、初めて出てきたものになりますかね。

○事務局 前回の3回目の検討委員会の中でも若干触れさせていただいたもので、今後の方向性という中で。

○大方委員長 これは文書として。

○事務局 文書の中身につきましては、これはもうあり方検討委員会の報告書の中で、こういう役割分担がありますよということを報告いただいておりますので、それに基づいた公民の役割分担ということでまとめさせていただいております。

○大方委員長 わかりました。なんか今、2ページのところで、私立幼稚園の役割の中で、多様なニーズに応じた講座と書いてあるので、余り講座と保育の中では言わないので、講座とは何だろうと正直なところあるんですけど。

○事務局 具体的な民間でやっておられる講座というのは把握をしていないんですが。

○大方委員長 というか、講座という言い方を保育では余り……

○事務局 使わないですか。

○大方委員長 まず言わないです。お母さん向けの何か、それでも余り言わないかな。

保育内容のことを言っているのかな。子育て支援のことを言っているのかな。

○事務局 あり方の報告の中で。

○大方委員長 講座と書いてありますか。

○事務局 はい。

○中谷委員 体操教室とか。

○大方委員長 ああ、そういう教室のこと。

○中谷委員 絵画教室とか。

○大方委員長 ああ、そういう意味の講座。

○事務局 ちょっと読ませていただきますと、あり方の報告書ですが、私立幼稚園では、それぞれの教育理念に基づき、特に3歳児保育の早期実践、保護者の多様なニーズに応じた講座や特色ある教育を実践するなどというふうな表現がございましたので、そこから引用させていただきました。一般的にそういう言い方というか、表現をしないというのであれば。

○大方委員長 ただ、その体操教室とかの意味もあったのか、お母さん向けの何か講座がありますよね。母親教室としての何か別建てで時間外にやる、そういう意味の講座。

特に質問ございませんでしょうか。

○中谷委員 3ページの(3)に預かり保育及び3歳児保育についてというところで、ここには市町村新システム事業計画の策定とあわせてということで導入するとありますけど、これは平成25年に国からおりてくるときに、3歳児保育と預かり保育ができると考えていいんですか。

○事務局 子育て新システムの中で、今言われていますのが、25年度の法施行を目指すという中で、その施行とあわせて、国のほうで基本方針をつくるんですけども、その基本方針に沿った市町村におけるニーズですとか施設の数ですとか、そういったものを踏まえて、これから幼児教育をするために、幼保一元、一体をしていくためにどういうふうにしていったらいいかということ、市町村においても事業計画を策定しなければならないというふうになってございまして、その施行時期というのは当然25年度当初に、今の予定ではなるかなというふうに思っております。

○大方委員長 これは書き方の問題でもありますね。3歳児保育をやってはいけないという議論は前回なくて、来年の春にやるには、実質的に議会調整が無理であるということだったと思うので、預かりも3歳児保育も。基本的には、この委員会としたら、ここは再編の委員会なので、それをどうせいかいことは言えないですけど、前回の最後のほうでそういうことをこの中に盛り込んでもらいましょうという話をしていたところで、来年という話も保護者からいただいて、ただ来年といったときに、今から準備するのに、私、政治のことはわからないですけど、議会調整で多分間に合わないし、私立の幼稚園の募集と

いうのはもう秋からすぐ始まってしまうので、後づけになると、かえってそれだったら私立を申し込んでおいたのにとか、タイミングは議会のことはわからないということが前回あって、少なくともそういうほう、3歳児保育、預かり保育ということも、この委員会としたら要望しましょうというふうなことを書きましょうということで前回終わったと思っただけですけれど、そのタイミングとかいうのは、やってくれるかどうかというのは、最終的に向こうの問題で、この委員会としたら再編するに当たって、そういうこともお願いできるようにすると。1項目書いておきましょうということだったと思うんです。

これは別に家に帰ってから考えたんですけれども、募集ができないと思うんですけれども、来年は。それか子育て支援みたいな形で、よく私立の幼稚園なんかだったら子育て支援の母子通園というところで、3歳児のところを拡充するとかということとは。

○中谷委員 そしたら、統廃合になった園は24年度から募集ができないんですか。今、4歳、5歳、いますよね。具体的に私がすごく現場にいるので、こういうふうになったらこの子供たちは、在園している子どもはどうなるんやろうとか、先生がこの間おっしゃったんですけれども、職員は3園に分かれても大丈夫、臨職の先生もいらっしゃるからとかと、いろいろお聞きしたんですよ。計算しても保育士の数も足りないし、職員の手も足りない。3歳児保育、クラスを何クラスにするかにもよりますけれども、そういうことがすごく今気になっていて、だからこの委員会の発言するところじゃないのかもしれないんですけれども、そういう具体的にどんなふうを考えてられるか、お聞きしたいなという気持ちがあるんですけれど。

○大方委員長 当然、現場にいるとね、それはもう身に迫ることやし、3歳児やる人も、1クラスか何なのかとか、部屋数はとか、いろんなことがあるので、そういう意味で、来年すぐというのはかなり、人員配置も含めて難しいかなというのはこの会のこの間の話で、やったらいいと思いますよ。

○中谷委員 でも去年、取石幼稚園が認定こども園になったときは、本当に急だったんですね。10月にちゃんと受け付けをして、10月末にはもう来年度からは、平成23年度からは認定こども園になりますというふうなことだったんですよ。それで、もうすごいすったもんだしたんですけれども、だから、反対に言えばできる、できるんですね。そういう無謀なことはしてほしくありませんけれども、でも今でしたら3歳児保育はどの保護者にもニーズということで、それこそ保護者のニーズに合った再編ということでしたら、やった前例があるんだから、できないことはないという反対の発想もあるかなと、議会がどうこ

うとかということは私もよくわかりませんが、できるんじゃないかという思いも持っています。私の個人の意見ですけれども。

○大方委員長 民間になら、これでやれといたら、これでやれる人が手を挙げてやるんですね。公立の場合、それがスムーズにいくかどうかというのは、ちょっと私もよくわかりませんが、これ民営化するんだったら、また話がややこしくなってしまうので、一応公立を残すという話になっていると思うので。

○中谷委員 保育室があいている園もありますよね。そこからでも試行的に取り組む。

○大方委員長 募集とかじゃなくて、子育て支援みたいな感じであれば、募集も含めて、先生方が努力して、その分をちょっと予備的にすることは可能じゃないですかね。あいている部屋とかがあったら。

○中谷委員 それは今でもしているんですよ。3歳児は年間27回、3歳児保育教室としてしているんです。そのほかに1歳から3歳までのお子さんを月2回園庭開放という形で支援センターという役を担っているんですけども。

○大方委員長 それは一時預かりみたいな形ではできないんですか。

○中谷委員 それはやっぱり職員の手が足りないので、一時預かりというところはできていないんです。在園児のいるところで、フリーや園長がそういう役を担っている。もう手いっぱいの中でいろいろ考えてやっているんですけども、そこまでが今精いっぱいです。

○大方委員長 募集はしないけれども、子育て支援で一時預かりで、毎日でも一時預かりしますよと。3歳児ということは幼稚園になってもすぐ、**不明**は利用価値としてはあって、そこに本当に来たい方やったら、午前中だけでも預かってくれはるんやったらみたいな形が3歳児保育に近いような、緩やかな。ただ、人手の問題とかいうと別の問題なんですけれども、子育て支援としてはだれも文句を言わないんじゃないかと。今すぐ募集とかいうと、システムのちゃんと部屋の保障とか人の配置とかいうとちょっと間に合わないと思いますけれども。先生方がある面で実験的にいえば変ないいかたですけど、3歳児が毎日来るとこういう状態になるんだみたいな。何人ぐらいいるとか、どれぐらいやったらできるとか、何が違うのか。親から離れたらどういう現象が起こってくるとかというのは、人の配置がないとなかなか大変やと思うんですけども、すごい大変と思うんですけども、これはやっちゃいけないということではないんじゃないかなと。

特にご質問がなければ、今、園長先生が言ってらっしゃったと思うんですが、この間言っていたことで、一応数字を入れてくださっていますかね。ここは一応再編会議なので、

再編基準というのはこの間一応だされていて、それを文章に書いていただいて、この間ト田先生がご議論いただいたんでしたかね。公立にどれだけ人が行っているかという就園率を基準にするほうがいいんじゃないかということで出していただいた。これで見ると、意外と羽衣さんなんかは公立に流れ込むというのが高いとなっていますよね、羽衣幼稚園は。人数というよりも、率としたら、その地域の子どもの数からいえば、公立に流れている割合が一番高いと。その次に、北と加茂が多い。高石駅、高南中学校区の高石、高陽が、率からいえば意外と公立に行っていないということは、逆に上がってはきていますけれども、この間の話でちょっと中学校区に1つは廃園になりそうだという、今ちょっと3つまでは何とか生き残っている状態という感じなんです、ここから今日の議論が進む。

○西條委員 5園とも行ったこともあるし、入ったこともあるし、知っているという状態の中で、この数字の違和感というか、全般的には多分、高石幼稚園はいろいろ厳しいかなというところ辺を持ってたんやけども、羽衣と北が、羽衣は多分上のほうだけど、こんなに差がつくとは、ちょっと違和感が、実際の感じとしたらある感じを持っているんです。ただ、僕のほうはその辺はよくわからないので聞きにくいかもしれませんが、なかなかどうしてかその辺の感覚は僕が知らない中でこんな感じなのかなというところがあります。

○大方委員長 羽衣のほう、公立へ行っている人がすごく多いと。隣接しているからというのが一番わかりやすいと思うんですけども、羽衣と北の違いといたら、隣接している以外だったら、就園率の違いというのは物すごく差が出てくるので。

○西條委員 就園率というのは大きいですからね。

○大方委員長 一番それが、再編からは一番気にせないかんのは、どれだけ公立希望者が多いかということなんで。高石・高陽は意外と少ない。

○西條委員 僕らわからんけど、先生言いにくいかもしれんけど、この点数にない何か情報とかいうのがあったら。

○大方委員長 数字にならないこと。

○西條委員 そんなものがあつたら教えてもらえたらなど。

○中谷委員 周辺環境は公立幼稚園としてのどうこうということではないとおっしゃってましたよね。そのところがすごく私は、これあるたびにすごく。どこも大体5点、うちだけ10点ですけど、違和感、私はこれ余り意味ないかなと、そういう意味では公立幼稚園のことを考えているのには意味がないかなと思います。

○大方委員長 この項目はなくてもいいかもしれない。どちらかという安全環境というならまだわかるんですよ。逃げる場所があるとか、待避場所があるとかいうような安全環境だったらわかるけれども、町並みというのは違和感ありますよね。

○中谷委員 小学校との連携というところで、連携と書かれたら、内容のことを私たちはすぐ思うんですけども、これは本当に道路を隔ててとか、道がないとか、そういうことでというふうなことというのは、ちょっと、言葉とこの数字はおかしいと思う。余り意味ないかなと思ったりします。連携の内容というのもよくわからないんですけど、羽衣さんは小学校と幼稚園はすごく連携されていますよね。ほかの園よりはよくされていると思います。でも、北幼稚園もほかの3園と同じように、小学校へ運動会に行ったりとか、給食参観に行かせていただいたりとか、そういう意味での連携はもちろんしていますし、ちょっと羽衣だけは、ほかにもプラスアルファ連携しているという感じだと思うんです。ほかのところはみんな横並びだと思うんですね。だから、北と羽衣で20ポイントの差というのは就園率の差で、これははっきり数字が出ていますので、その差だけだから、10ポイントは差があっても、70と50というのはちょっと、そんなじゃないかと思うんです。

北は耐震、保育棟は新耐震基準でということですので、そういう意味では、羽衣に比べたらやっぱりそういうところ、危機管理の問題からしてもやっぱり大きいですよ。数字が出たら、これで決まってしまうのかと思いがちですが、そこはやっぱりちゃんと見ないといけないなと。

○大方委員長 項目として必要かどうかということも大事なので、さっきの周辺環境はせめて安全・避難環境とかいうふうな名前に変えたほうがいいかもしれない、入れるとすれば。安全・避難環境、それかこの項目はあとのあくまで参考、環境としての参考で、点数化はしないほうがいいかもしれないですね。

○ト田委員 小学校との連携というので、位置関係だけで見るというのは、ある種合理的ではあると思うんです。なぜかという、今後、どちらかという、公立幼稚園は幼小連携を一生懸命やっていますよということを売りにしていく上では、物理的に近いということとは、逆に言ったら、残ってこれからやっていくところは、幼小連携を今まで以上にやっていくという方向に打ち出さないといけないところにはなると思うんです。だから、どちらかという、連携をしているという結果のあれというよりも、これから連携の可能性がどれくらい高いのかという、数字として考えていけば、残していく価値のある数字かなと思うんです。

ただ、おっしゃられたように、北が保育棟が新耐震基準で唯一オーケーな建物であるというようなことだというような意味合いのことを考えていくと、実はここの数値にあらわれていないところで、羽衣と北の間は割と近いところがあるのかもしれないという気はするんですよ。

○西條委員 もう1点、ちょっと聞きたい。これはお聞きしたいんですけども、例えば再編されたときに、部屋の数とか、そこは全部、例えば、この点数どおりいけたら、それは大丈夫なのかなと思ひまして。人数が増えるわけ、単純に今の数そのままいったとしたら、これは大丈夫なのだろうかと思ひまして。

○事務局 今の部屋のキャパシティーといいますのは、定員に合わせた保育室の数にしておりますので、4歳、5歳児、加茂を除いてそれぞれ70名定員ということで、1クラス35名ということで、それぞれの幼稚園には保育室を4室確保しているんですけども、園児が減ったということで、ほかの用途に利用されている部屋がほとんどになります。その部屋を片付けて使うことも考えられますけれども、3歳児の導入ですとか、その新システムを考えますと、冒頭に申し上げましたように、保育室棟の増築でありますとか、給食室の増築というものが必要だと考えてございまして、市でつくるシステムの事業計画の中では、そういったものも盛り込んでいかなければならないというふうに考えております。

○事務局 今申し上げた今後といった意味で、現状を見ていただくんでしたら、この表を見ていただきましたら、例えば高石と高陽、70、70の定員に4歳児、5歳児につきまして、園児数が高石が11、12、高陽が18、25ということになります。例えば高石と高陽が1つの園になったとして、29名の4歳児と37名の5歳児ということですので、4歳児は1クラスのままで5歳児は2クラスになるわけですね。それから、その下の高石中学校区の2つが1つの園に、ここは実際はなりませんけども、このとおりになったとしたら41、これは2クラスですね、4歳児。それで、5歳児が48、これも2クラス。それだけの、羽衣が残ったとしても、北が残ったとしても、2クラスずつのキャパはあると。部屋があるということになります。ただ、今後、3歳児であるとか、ゼロから5歳であるとか、新たな展開になりましたら、北口が申し上げたとおりでございまして。

○大方委員長 ありがとうございます。ということでよろしいですか。

ここの点数のつけ方に関しまして、まだ何かありますか。

○中西委員 先ほど、小学校との連携というところで、確かにこれは距離だけの点数だなというのがわかるんですけども、実際、地震なんかで震度4とかの大きい揺れがあるとき

は、幼稚園から小学校へ避難するというふうに聞いているので、やはりこの数値は高いのがもっともかなという気がします。

○大方委員長 逃げやすいということですね。これだけ地震のことが言われていると、やっぱり安全避難経路、小学校と連携して、いざとなったら一緒に逃げるぐらいの、助け合えるような関係というのはすごく大事であって、隣接が一番よくて、少なくとも近所にあるほうが、再編ということを考えたならば、この再編は夢のある再編にしたいんですけども、いいかなという感じがします。

○菊野委員 ある小学校ですけども、小学校と幼稚園の門が離れているんですけども、つくり変えたんです。もう一つつくったんです。そしたら連携しやすくなったというのがあって、距離って意外と関係するのかなと思ったんです。人によって違いますけれど、つくったけれどもあかん場合もありますし、人によったらね。

○大方委員長 それでも、可能性としたらやっぱり、できるだけ行き来しやすいようにとかいうように、でないと、鍵開けんかったら、隣逃げれなくてフェンス乗り越えましたという話になると困りますので、校長先生の考え方にもよるんですけど、連携とか持っていただけですか、報告書のときに。この隣接を仮に選ぶとしても、ここにポイントを上げているということは、小学校との連携の可能性と安全面ということと、それからより可能性が高くなる創意工夫を求めるというふうに。そうしないと、ビジョンにならない。

○事務局 差し出がましいかもわかりませんが、連携と位置関係を入れかえまして、例えば幼稚園、小学校の位置関係、括弧して連携と。そういうふうにさせていただいたら、園長先生のおっしゃっている、どの園も連携しているのに点数が低いということには、ならないのかと思います。

○大方委員長 そうそう、何か連携していないみたいですよ。

○事務局 遠いですよというようなのも払拭されるだろうし、地震のときの避難、公立のよさのアピールそういった面も今後打ち出していくんだという意識のあらわれになるのかなと思います。

○大方委員長 そういうことにしていただいたほうがいけないかと思いますが。周辺環境という呼び方もちょっと変えていただいて、ここは点数を除いたほうがよくないですか。ここで点数というと、何か違和感があるので、点数なしにしてください、せいぜい地域避難環境ぐらいのイメージぐらいにしていただければ。参考ですよ、避難経路としての。

もう家に囲まれて逃げ場がない袋小路なのとか。点数にするとそれで決めたみたいなのは嫌なので。

○ト田委員 ここがなくなると、90点満点になりますよね。あと10点を配分をし直さないといけない。5項目だから2点ずつというわけにはちょっといなかいでしょうし、100点満点ということを考えていくと、その10点分をどこかに。

○大方委員長 なるほど。

○菊野委員 それで、この点数は出るんですか、表には。総合計。さっきと同じ話になるかもしれませんが、これ見たときに、実際と違うやんという話よりも、近いわというほうがいいのかなど。その点数も近い形にしたほうが納得できるやろうなと思って。低くても、高くても。

○大方委員長 残すとすれば、避難環境とかいう形に変えて、このまま残すというのもひとつ。

○事務局 よろしいですか。参考ということでございますけども、ずいぶん前になるんですが、保育所を民営化をするときに、一定の基準を設けて、どこを民営化していくかというふんでですね、平成17年か18年ごろやったと思うんですけども、その当時保育所2園を民営化するという中で、選定基準を設けたんですけども、そのときに採用されましたのが、建物の耐用年数、老朽化の度合い、それから保育に関するニーズ、わかりにくいんですけども、そういったものと待機児童がその地域にどれぐらいあるかというようなことと、それと立地環境と入所の状況、そういったものを選定基準として、しかしそうじゃなしに耐用年数がまだまだあるよというようなところを丸とするとか、老朽化の度合いが低いよというところを丸とするとか、そういう方式で丸の多いほうを民営化していったというような経緯がございます。そういったやり方も一つの方法かなと思われまます。

○西條委員 これは表に出ると考えてよろしいですね。

○大方委員長 出るんですね。報告書だから、ここで決めるわけじゃないけれども、報告するに当たっての参考として出るわけですね。バックアップですから。一応この前、評価基準を決めて出たので、またここで戻すと話がややこしいので、これでいいと思うんですけどね。ただ言葉のこととか、配列とかは今直してもらったほうがいいんじゃないかと思うんです。当然、耐久年数とかいうのは、せっかく新しく建てたのをわざわざなくなるよりは、建てかえる時期に来ているもののほうが一般的には望ましいし、その分危険度が高くなるということにはなります。そうすると、やっぱり一番古いのはどれか、昭和48年で

すか。

○事務局 北幼稚園の管理教室棟。

○大方委員長 これが一番古いんですよね、昭和45年。

○事務局 北幼稚園につきましては、築41年というのは基準で申し上げますと5点なんですけども、下の保育棟のほうが築年数30年以下で15点ということになるんですが、15点と5点の平均10点ということになっています。

○西條委員 僕ちょっと初めに、違和感があるというところがあるんですけども、違和感があるのは、僕が知らなかった部分の特に就園率というんですか、就園率というのは、なかなか実際に行っている中ではわからへんというところと、それから築年数のところ辺、この辺はやっぱりなかなかわかりにくいというところで、今これを、議論を聞いている中で違和感があったのかなというところ辺で、そういう話を煮詰めてきたら、何となくという感じにはなっているなという気はしました。

○大方委員長 人数的には一緒なんですよ、在園児数は、46と。だから、何で、校長先生おっしゃるように、20ポイントの差というのはわかりにくいです。ただ、その地域の子どもの数の数からいって、公立へ行っている割合が羽衣のほうが非常に高く、それはもしかしたら北のほうに民間幼稚園があるからか、ないのか、バスでも来ているのか、それはちょっとよくわからないんですけども、結果としたら、今流れていると。羽衣のほうが定着率が高いというのは、この25という数字ですね。見えないけども老朽化が進んでいるというのが北の問題であって、そうすると、結果としてやっぱり20点ぐらいの開きにはなっているのかなという感じがします。

ただ現在、羽衣、北に関しては、校長先生おっしゃるように、同じような人数がいるんです、在園児さん。さっきからおっしゃるように明らかに人数が、今現在だれが見ても少ないというのは高石なんです。よくも悪くも高石で、そこは建物もやっぱり羽衣と一緒にとはいえ、新しいわけではなくて、小学校との連携といっても、若干距離があるとかいうことが出てくると、高石に限っていうと、再編の中で何かを再編しなきゃいけないとなったら、どうしても一番に高石が上がるかなという感じですよ、これを眺めると。羽衣と北に関しては、25、15なので校区でどっちかやったら、このままいけば羽衣という感じに、ポイント的にはなるんですが、今、どちらを再編するのとか言ったときには同じような感じになって、やや違和感があるのかなという感じはします。ぱっと聞かれたときには、同じように感じるやんという感じがあってね。ですから、ちょっと可能ならば、やや緩や

かに1個、次の再編みたいな形で、段階を踏んでいくみたいなのがいいのかなという感じはしなくはないですが。

○中谷委員 幼児人口に対する就園率のことなんですけれども、この数字から見たら、なぜ公立幼稚園が選ばれているのかということは全然見えてこないんですけれども、やっぱり何か理由があるんじゃないかなという気もあります。

○大方委員長 どっちにしろ利用されようと思う人の要望は高い。

○中谷委員 それはあるんですけれども、でもそうですね。それはそうなんですけれども。

○ト田委員 反対に、だからこそ公立幼稚園が絶対必要な地域という考え方もできるのかもしれないですね。

○中谷委員 それもありますね。ポイントの差というのが、それはそういうことなのかなと思うんですけれども、反対に北でも公立に行きたい。財政的に行けるから私立に行かせているというのがありますけれども、やっぱり望んで行かしていない、やっぱり公立がいいと思っても、やっぱり私立に行かせている方も反対にはいるので、その辺、逆なことを言っているんですけれども、そういう背景もあるということはやっぱり認めていただきたいなという。

○大方委員長 基準とこの数字に関しては、これでよろしいですか。

事務局、今書いていらっちゃって、今のこの表のことで、一たんまとめてもらえますか。

○事務局 まず、周辺環境それから避難環境、地域の避難環境という項目に変えて、これは参考程度にするとして、ポイントは変えないという方針で変更したいなと思いますが、その場合、さっきト田先生おっしゃっていただきましたけども、満点が90点になるんですが、それは別に構わないですか。その辺どこかほかに配分したほうが適正だということなことがあれば、ほかに配点し直したいなと思うんですが。

○大方委員長 さっき言ったように、2択あって、この言葉を地域避難環境とかいう形に変えて、このまま残すか。でないと、この10点をどこにひっつけるとかいったら、またちょっと悩ましいじゃないですか。だから、あくまでも周辺環境という意味が、幼児教育と結びつきにくいので、みなさんご意見があるので。

○西條委員 よろしいですか。大きな差がないんじゃないか、言葉としては残しておいてもええんちがうかなと。

○大方委員長 一緒に、加茂だけは周辺道路が整備されているということで残したところで差異は出ないので。

○事務局 わかりました。では文言の修正ということできせていただきたいと思いますんですけども、お願いします。

小学校との連携、その部分はわかりましたけども、ここについてはあくまで幼稚園と小学校の位置的な関係、括弧書きで連携というようなことを書かせていただくと思うんですけども、内容としましては、位置的には近いほうが連携の可能性が高いですとか、災害時の避難についても、できるだけ近いほうが安全性が高いというふうな、物理的な点から、近いほうがポイントが高いというふうに考えられますので、そういった意味合いでのポイントづけをしたいなというふうに思います。

○大方委員長 小学校との連携は、今後の可能性も含めてということで。

前は、1個になりそうなのがとりあえず中学校区というところまでいって、今日はこういったものが出てきて、どうしようというところきて、次回はもう報告書を出す。ここで決めるわけではないんですけど、一応再編会議としての報告書はもう次回に出すという形になっていますし、方向性だけある程度今日決めていかないといけないところがあるんですが、大きな意味でいえば、高石市立幼稚園の再編については、1中学校区1幼稚園、基本ですよ。まず、基本として再編する。ただ、ここからが問題です、タイミングの問題であるとか、時期であるとか、この前保護者の方がおっしゃったように、平成25年に新システムが出るならば、そんなに急がなくてもいいんじゃないかということがあったというような気もするので、ちょっと緩やか目に可能ならば考えてもらえるならばということは再編、今度の新システムを見通して時期を決めてほしいというようなことは書けないだろうかという気はします。

じゃ、何もなかったというわけにもいかないの、残念ながら、だれが見ても先ほどおっしゃった高石に関しましては、ややしんどさが人数的にも残っていて、いろんな条件から考えて、この中で総合点から見ても、高石になっていくんですけど、高石に関しては、ややしんどい。ここに関してはちょっと再編するということに報告せざるを得ないかなという感じがします。

羽衣と北に関しましては、みなさん意見言ってくださっていいんですけど、今これ表を見たときに、就園率からいうと、このままいけば、どんどんと北は減っていく可能性は高く、少子化なので、待機児は多分いらっしやらない。待機児が相当多いということならば、ちょっと次回までに、待機児がいるかどうかというのは一回チェックしておいたほうがいいと思うんですけども、多分今、待機児はいない。

- 事務局 保育所のほう。
- 大方委員長 いえいえ、違います。幼稚園にもどこにも行かずにいる方。
- 事務局 行けずにということですか。
- 大方委員長 そうそう、行けずにという人はいないでしょう。
- 事務局 いないです。
- 大方委員長 いないですね、残念ながら。希望的観測で言ってみたんですけど。
- 事務局 幼稚園のほうは。
- 大方委員長 あいているわけやね。
- 事務局 幼稚園のほうは定員まであいています。
- 大方委員長 そういうことで、あきがあるということは待機しているわけないので、ということは、25、15という就園率100%のうちの15%なのでかなりちょっと。今後の見通しとしてはしんどいということは、この会としては言えるのかなと。ただ現在の子どもの数がほぼ同数になっているので、少しその次の子ども新システムということを見越して考えていっていただくということもあってもいいのかなと。そのときは幼保一体化も含めて国からおりてきますので、緩やかでもいいのかなという気がしなくはないです。皆さんがここで決めておこうと。1番、2番、3番、はいと言っていうならそれもありやと思うので、方向としては、評価でいえば、次は北になるであろうという予測ができなくはないですけども、まあその時期とかに関して、ここで、私たちはあまり決めたくはない部分はあるので、次の平成25年の新システムを見越して、時期を決めていただくという形がありがたいかなというふうに感じるんですけども。決めておくほうがよければ、方向性だけは決めておいてもいいかなと思いますけど。
- それから、もう一つあるのは高石がどうしても、私としては言いたくないんですが、今いらっしゃる23名ですよ。年長さんは少なくとも来年卒園されますよね。だから、この人たちは問題ないですよ。この再編については11名の方がさっき園長先生おっしゃったように、4歳児の入園は募集は停止はしたとしても、11名を高石で卒園式を迎えるように残すのか、いえいえ11名で幼稚園が成り立つのかということで、スクラップの状態になるのか。実際は2択あるわけですが、再編の中のさらに縮小再編においては。保護者の気持ちをおもんばかれば、11名でも最後まで卒園させていただきたいと、多分この11名の方はいらっしゃるであろうと。
- 中谷委員 保護者のアンケートでもその声がたくさん出ています。統廃合になるから近

いところへ行きなさいでは、やっぱり言いにくいところがあります。

○大方委員長 園児募集はちょっと停止せざるを得ないという感じはします。11名で成り立つのかということですね。安全ということに関して、11名の方々がどこにいざとなったら待避するかということは、いずれにしろ考えておいてもわからないと、人数が少ないということは、少ないから守られるという部分と少ない分人手も足りなくて逃げにくいという部分と、存在が地域から見えにくくなっていきますので、そこら辺のところは、保護者としても、どこかといつも連携していかないと、子どもたちも11名で、寂しい感じで園舎としたらなりますし、今でも少ないのに、さらに11名だけが残っているという感じになるので、もうちょっと兄弟がいらっしゃる方が別々に園に行かれることになるので、まあそれは保護者がお選びになるのはいいと思うんですけどね。ト田先生いかがですか。

○ト田委員 移行段階になって、**不明** 難しいですよ。特にある程度の集団の人数が確保されるのであればというところはあるんですけど、少なくなると、あと特に年長者として年下の子とかかわるといふ経験がないままというところの経験の偏りというのがあるってというのをどういうふうクリアしていくのか。そこは例えばほかの園でしたり、保育所さんとの連携という形でフォローしていくというもあるし、ある種の工夫というのが求められる部分もあるでしょうね。

ただ、どういうふう、じゃ移って、統合で移ってもらいますという形にしたときに、そしたら今の11人の4歳児さんが、市立の幼稚園に残られるかどうかとなると、そこもちょっと微妙になってくる可能性もあるんですよ。それだったら、もう民間に行くわという話になってしまうという可能性もあって、そうなってくると反対にしめるということも出てくるということと、なくすというか、そのまま段階的に5歳児が卒園するまで園を残すというのであれば、やっぱりその中でどういう経験が不足してきて、そこをどうフォローしていくのかというビジョンというのが示される必要はあるんだと思うんです。そうなってくると、結構最後の一年を担っていただく先生方の工夫と連携のありようというところではかなりいろいろあるでしょうし、それこそもうオール高石で取り組んでいただかないと、いい形でのあれはできないだろうし、ただそのほうが保護者の方がこの先に対する納得度というのが高くなるだろうというところがあります。

○中谷委員 どちらにしても、そういう人数、残された11名をどうするかということを考えていかないといけないのはもちろんだと思うんですけども、その前にこういうふうになるとしたときの市からの保護者への説明というのを必ずしていただきたいんです。その

上で、保護者が納得して、公立に残ったり、やっぱり私立へというふうなことは、筋が通ると思うんですけども、こういう紙1枚で募集がこうなりましたというふうなことだけでは、やっぱり保護者の反感というものもますます強くなりますし、清高、取石と、皆さん納得されないまま来ている、今度3回目になるので、公立幼稚園離れということはすごく大きいと思うんです。だから、その辺をやっぱりしっかり考えていただいて、対処していただきたいと、本当に切に希望しますのでお願いします。

○ト田委員 ちょっと先の話になるかもしれないですけども、5年後、10年後まで言えるかどうか分からないですけども、少なくとも5年後に高石の幼稚園、市立の幼稚園教育というのは、新システムの導入によって変わるでしょうけれども、こういう形で再編して、こういうビジョンでやるんですということが減っていくのではなくて、計画で示さないと、先生おっしゃられるように、公立へ入ったらいつ減っていくかわからへんという感が出てくると、公立に行きたくなくなるというような話もあるんですよね。この形でとりあえず一たん固定する予定なんですというところが示される必要も本当はあるんだと思うんです。そのときに、こういう売りというか、こういう柱でやるんですというところが示されれば、ある程度納得していただけるでしょう。

○中谷委員 市がビジョンを、いつもお願い、どんなふうなというようなことをお願いするんですけども、なかなかちゃんとした検討、お話をいただけないことも確かにあるので、この機会に高石市としてどんなふう地域に根差した、どういうふう子どもを育てていくか、それに対しての公立幼稚園の教育目標をどうやっていう、具体的な指導をいただくということのいい機会だと思うので、お願いしたいと思います。

○西條委員 今のでええと思うんです。きついやけども、やっぱりそういうビジョン、やっぱりある種幼稚園の先生方のほうから、やっぱりよさみみたいなものを、教育委員会のほうで指導出してくださいだけじゃなくて、そこは危機感を持って、こっち側からやっぱり園長先生、特に園長先生だったら公立のよさ、こんなんとかいうところ辺も出していく工夫というのを同時に必要、再編された後でも必要になってくると違うかなという気はします。

○中谷委員 その点はあるという気がしますが、していないわけではないんですけども、やっぱり現れにくいところで、私たちがいるということはあると思います。でも、先ほど言いましたように、親子見学会の3歳児保育とか、そういうのは私たちが自主的に取り組んでいるもので、市のほうからいくらか予算をいただいたりしているんですけども、

そういうところでとまっているのは事実なので、小学校の場合みたいに義務教育ではない部分、やっぱり判断の厳しいものがあると思いますので、甘えた立場でいたのかしれないですけれども。

○西條委員 僕らは知っているんやけども、市民とか何か、届いてない気がしてるんで。僕らは幼稚園のことよう知ってるんやけど、それが見えにくい。

○中谷委員 ある意味アピールしたらと言われて、私たちはアピールしているつもりなのになかなかその辺がわかっていただいていないところは、私たちになにか問題点があるとは思っています、そこは。真摯には受け止めています。

○中西委員 その関連で、もうこの時代、インターネットも全然普通に普及していますよね。幼稚園にパソコンがあったので、ホームページでもっと宣伝してくださいよと園長先生に言ったことがあるんですけど、パソコンはあるんですけど、インターネットを引いてもらっていないと聞いて、すごいびっくりしたんです。それは全部ですか。公立幼稚園はすべて。それはどうしてですか。やっぱり予算的なことですか。

○事務局 市全体のシステムを構築する中で、どこに持っていくとか、どこが要らんとかいう、そういう作業をされたみたいなんですけども、何で幼稚園だけがつながらなかったのか、私そのはっきりした理由はわかっていないんですが、小学校や中学校は当然つながっているんですけども、幼稚園については設置されなかったというのがありまして。

○中西委員 今の時代、やっぱりもう……。

○事務局 要望はありますし、我々もそれは必要やということで、情報を管理している部署には、ぜひネットワークは築いてほしいという話をしているんですけども、次の見直しの時期には考えるというぐらいで触れてはおりますけども、幼稚園の再編の問題もありますので、一旦落ち着くというか、そういうことがあってから考えようかというようなことでは聞いています。

○大方委員長 特に若いお母さんはネットで検索して幼稚園の情報を。今、民間はすごいそこにお金をかけていますから、システム組むのってすごくお金かかるので。更新していかないといけないし。

○事務局 市のほうでホームページがですね、各担当課のほうでホームページの中身について作れるシステムになっていますので、もし各幼稚園のほうでこんな情報を載せたいとかいうのがあれば、面倒ですけども事務局のほう来ていただけましたら、そういうものを載せることもできますので、そういう機会も利用していただいて、PRのほう勧めていた

だけたらなあと思います。

○菊野委員 公立、私立の場合の違いというか、早期教育に対する考え方だと思うんですよ。うちの幼稚園というのは私立なんですよ。でも、来ないんですよ、なかなか。なぜかという、早期教育をしないんです。そうすると、親御さんは来てくれないんです。うちにはどうして来んですかと聞いたら、子どもの主体性は幼稚園に頼みますけど、知性についてはほかの教室に行きますという感じの、そういう教育のあり方みたいなのが違うのかなと思ってね。早期教育したほうがいいとは思ってないんですけど、そういうところ辺も関係するのかなと思って、その辺が厳しいところやろうなと思ったり。

ある某有名な幼稚園ですけれど、変えられたんですよ。早期教育違いますよ。知性とは何かということを考えられて、それですると、結構いい形になったりね。親御さんがどうしても知性と思いはるんですよ、どうしても。あれこれあるけども、早期教育がいいということね。そういうことを学校も考えていく。だから、幼稚園の先生方も子どもが中心、そういうことは大事ですけど、それ以上のことを考えていくことが必要なのかなと。難しい話でね、今ここでできる話じゃないですが。

○中谷委員 でも、やっぱり保護者のニーズということもあります。子どもの興味ということが公立幼稚園では一番大事にしていますけれども、やっぱり文字に興味を持つ子もいますし、そういうところでは、教室みたいにして教えるわけではありませんけど、興味をうまく引き出して公立ではやっていました。

○菊野委員 僕らはわかっているねんけども、親御さんは見えてこないんですよ。

○中谷委員 公立に来てくださった保護者はそれがいいと言ってくださって、公立はやっぱり残してほしいとは言ってくださるし、なかなかそこは私立に行かれています方には伝わりにくいというのは、それはありますね。

○菊野委員 多少うちは知性という形も入れて、文字学習をやっているみたいですね、最近。

○中谷委員 私立でやっていることは、公立でもやっているんですけどね。

○菊野委員 それが見えてこないし、知性って何かというと、算数することが知性だと思ってしまうし。

○中西委員 やっぱり公立のよさは、先生方と保護者の関係をすごく大事にするし、実際幼稚園に行っていて、先生のお手伝い、幼稚園のお手伝いができることは、私たちにできることは何でもしますという気持ちは、やっぱり強いんですよ。母親のほうが、PT

Aが。

○菊野委員 それやったらええけど、なかなかうちはふえない。それが来ないところが。

○中西委員 でもやっぱり公立は多いと思います。すべてのお母さんとは限らないですけども、やっぱり雰囲気がそういうふうになっていますので。

○菊野委員 それも開拓するわけですよ。なかなか僕らもあっちこっち行って、ビラ配ったりするんだけど、そこら辺がなかなか増えてこない。すみません、何か余計な話ばかりして。

○大方委員長 校長先生は。

○西條委員 僕が見た話で、僕が知っている連中からいくと、公立と私立の違いは3年と2年の違いだけやみたいな感じぐらいしか、なかなか、公立のよさ、よさのところまでいってない。公立のよさがわかってもらえていない気がやっぱりあるなというところ、その辺が惜しいというか……。本当に子どもとの、さっき言った地域との兼ね合いとか、ああいうよさがなかなか前に行かないというところ辺が惜しいなという。

○中谷委員 心を育てていこうというふうなビジョンでこういう教育にしているので、そういうことが見えないので、跳び箱が3段跳べるようになったとか、逆上がりができるようになったということははっきり目に見えたりしますけれども、でも私たちはその心を育てることで跳び箱が跳べたり、嫌いなものが食べれたりとかいうふうにつないでいっているんですけど、見えない部分をどんなふうに見せたらいいのかというのは、私たちの課題なんですけれど、そこははっきりさせていきたいなと思っているんですけども、何かいいアドバイスがあれば教えていただきたいんですけども。

○ト田委員 例えばホームページなんかでも思うんですけど、学生がよく就職とか実習とかのときによく見ているのは、大阪であれば大阪府の私立幼稚園連盟さんの連盟として持っているホームページで、中の各幼稚園のリンクへ飛べるというのがあるんです。あれを見ておもしろいのは、1ページ目は幼稚園の概要と園舎の写真と創設年、園長名とかを上げていて、次のページまでしかないんですね。そこは保育方針と保育目標というようなことや年間行事みたいなことが載っていて、あとは写真が3枚だけ載せられるんです。私も、もともと私立幼稚園の教員だったので昔、その作成のときにかかわっていたので記憶にあるんですけど、この3枚をどれを選ぶのかということで、幼稚園の何を伝えるのかがすべて決まるんですよね。逆にいえば、学生にもこの3枚でどんな写真が写っているかで、園の保育がある程度わかるという、実質は言葉よりビジュアルで見ているところがあると

思うんです。そしたら、こんなに好きな遊びをしながら楽しそうにやっているということが伝わるというところもあれば、私立で行事を派手にされるところなんかは、市民会館で演奏会をやっていますみたいなのを載せたりされるという。そこの2枚のホームページだけでも幼稚園でつくられるだけでも、実は相当伝わることもあるんじゃないかと思うんです。ブログアップしてとかなると、それはそれは大変な作業が日々やってくると思うんです。肖像権のことであったり、何であったりとか、かなり配慮しなきゃいけない点もあると思うんです。余力ができてきたら、そこまでということはあると思うんですけど、まず、その1ページ、2ページのところで、1園写真3枚の世界でやっていっても、実は相当何かが伝わる。見ている方は見られているということになるのかなというふうにも思います。

何かそういう発信があることというのが、何で今回こういった形でやりますよというふうなことになったときに、それがやっぱり目減りしたというか、何か過疎化したみたいに見られるのが非常に辛いものが当然あるでしょうし、それぞれの園で実践が伝わることが、やっぱり一番大きいのかなと思うんです。

○大方委員長 さっき言った3歳児の親子のほうもたくさんやったらというのは、そこで入ってもらったら見えるじゃないですか。塀の外から見ると、がらんとしているな、何か人気がないなみたいで、余計にさみしい感じになるし。私立なんか美しくしたり、ペンキ塗ったり、見た目からかわいいとか、幼稚園がここにあるっていうのがあって、公立の場合は、何も派手にする必要は全くないんですけど、でもちょっと、心を育てるって言ってもお花がいっぱいあって、お花があるとそこは幼稚園だったとか、何かもうちょっと、花植えるのも、育てるのも、手間暇かかるし、大変なんですけども、何か……

○中谷委員 それはしているんですけどもね。

○大方委員長 そこに幼稚園という、意外と看板は見えないんです。

○中谷委員 看板、かわいくないですね。

○大方委員長 一回、それこそ実習生でも来た時につくってもらって、木でも何でも、トールペイントでも、今どきは何でもあるじゃないですか。保護者につくってもらって、外から見て、ここに幼稚園があるぞというとかいう工夫ぐらいは保護者の手もあるので、そういうのが得意なお母さんに、保育所じゃないので時間のある方もいらっしゃる、趣味のある方をお願いして、まず通りから見えない、閉鎖的で中へ入れないんで、何があるんやろうここみたいに、幼稚園があることも知らなかったというような方がたくさんいらして、こんなところにあるんやみたいだね。私立だったら絶対わかります。ここに幼稚園があると。

もう、まずあるというのがよく見える。

○西條委員 教えてほしいんですけども、どこか他市で例えば統廃がありますね。なったときはさっき言ったように、例えば人数が少ないときは、その子らが卒園するまで、その園へ置いておくほうが多いのか、ある程度、割り切って、一緒になるほうがいいのか、それはどっちが多いんですか。両方ありますか。その違いは何ですか。

○大方委員長 それが例えば民営化して、そのままそこに何かが残る場合はそのまま、そっくりそのまま引き受けてもらうという形になるので。

○西條委員 こういう、例えば高石と高陽が一緒になって。

○大方委員長 一緒になって、何かが民営化するとかいうのであれば。

○西條委員 民営化しないで、例えば吸収みたいな感じだけでも、これはどっちかいうたら。

○大方委員長 それは立地条件として、通えるんやったら吸収。ということもなくはない。だから、別々のクラスで置いておくということも。年長さんの片一方のクラスが1個部屋があいているんだから、片一方は高石から来たクラス、片一方は高陽から来たクラスで、同じような校区で小学校に仮に行くんでであれば、そこで複数学級が生まれるということ考えられなくはない。

○西條委員 例えば10名で、ちょっとそんなんやからというて10名弱、10名ぐらいで、現実的には園というのはどうやるなど。

○中谷委員 集団教育というところでは弱いと思いますけれども、現に以前、羽衣幼稚園で14名で5歳だけのときがあったんですけど、14名で保育、1年間したこともあるんです。人数が少ない、集団という意味からすれば、随分離れるけれども、そこはそこで人数が少ないなりに手厚く一人一人を大切に作る保育ということで、きめ細かな保育をされた。実際私も知っているんですけども、そういうこともできると思います。清高幼稚園が以前民間になったときは、4歳の子がそっくり加茂幼稚園へ。

○西條委員 そのまま行ったわけね。

○中谷委員 そういうことなんです。

○西條委員 だから、2種類あるわけですね。

○中谷委員 少なかったら少ないなりにやっぱり他園との交流とか、そういうのをもっと積極的にしますし、しないといけませんしね。そういうところは、その園でいろいろみんな考えるし、全員で考えて、保育は、計画はしていくと思います。

○大方委員長 園全体としての集団力としても、20人がまだ減っていくんでね。全員が縦割り保育をやったとしても、20人もいない状態。かなり集団としたら、家に帰ってもいないし、知り合う、出会いのチャンスがないですよ。そういう面では、小学校行って今度ね、たとえ30人もいたら、子どもがびっくりというか、不適応を起こして、今まで11人で手厚くしてもらって、今度小学校35人になったときのことを考えると、いい意味で、残すとしたら、よほど工夫して集団力を高めていってもらわないと、小学校に行ってからの子どもの育ちというのがかなり適応しにくくなる可能性がある。そもそも子どもが少ない幼稚園の問題というのはそこにあるんです。保育の中身がどうか、公立がいいとか悪いとかじゃなくて、少な過ぎるとやっぱり、家へ帰っても少子化ですよ。だれかの家に遊びに行くという時代でもないし、公園へ行ってもだれもいないので、幼稚園という安全なところで人に出会わないと、なかなか集団力という、もまれる経験というのか友達を見て学ぶということも11人やったら。少ないと序列ができる危険性があるんですよ。多いとまぎれてしまうんだけど、11人ってはっきりと、何々ちゃん、何々ちゃんとする、そこにイメージチェンジがかえってしにくくて、多いとこっちの子と仲良くできなくても今日はこっちの子と遊ぶとかできるんですけど、11人やったら、この子と一緒になかったら入れてくれないと言われたら、すごくしんどい。固まってしまうんですよ。能力のある子はある子で、遊び力が高い子は高い子で物足りなくなってくる、ごっこにならない。しんどい子はしんどい子ではじかれてしまって、その辺が幼児教育として20人下るとしんどいですよ。再編というと、数の原理とその経営じゃなくて、この時代の子どもの育ちというのを考えると、小学校に行った時の適応性を考えて、時代の背景を考えると、20人切るっていうのはややしんどい。それは地域的に、過疎地域やったらこれ仕方ない気もするけど。そういうのがあります。だから、残ったとしても、やっぱり教育的配慮として、そこはやっぱり小学校に行くまでにいろんな子どもと出会うと。 **そしたら 不明**

○ト田委員 週に1回はどっちかの幼稚園に通う、保育所と週3日の交流をすることもあ
るかもしれない。反対に、もし一緒にするという場合は、それ相応の配慮が要ると思うん
です。高石幼稚園から来た子、その子たちで例えば1クラスが構成される。それで、担任
の先生もできれば高石幼稚園から移って。

○中谷委員 清高のときはそうしたんです。

○ト田委員 というような配慮がないと、やはり納得というのはなかなか行きにくいだろ
うというのはあると思うんです。

○中西委員 仮に、例えば統合された場合、小学校が仮に羽衣と北と一緒にあったとしたら、羽衣は羽衣小学校、北幼稚園は東羽衣小学校に行くんですね。そうすると、幼稚園と一緒にになると、交流する学校というのは羽衣になるんですか。もし羽衣に北幼稚園が来るとなったら。

○大方委員長 両方ですよ。

○中西委員 中で、幼稚園が半分に分かれるということですか。自分の行かない小学校と交流するということですか。

○大方委員長 当然。行く、行かないじゃなくて、小学校、小学生という児童とどう交流するかということなので、それでなくても、地域はどんどん、高石は全部集めても狭い地域なので、そうしないと中学校に行ったときに、本当にこの人しか知りませんという形ではやっぱりよくなくて、いろんな人と出会っておくということは、子ども時代にすごく大事。今は出会いにくい時代に入っていますから、どこの小学校の子やからとか、こっこの小学校やとかじゃなくて、同じような地域の中で、もちろんそこには幼稚園の先生の努力と校長先生のご理解がないとできないんですけれど。あのとき会ったことあるわというのが物すごく大事です。

○ト田委員 そういう意味では、両方と交流されるけど、でも隣にあるということは、日常的に交流ができるのは、核となるのはそこなんです。そこで小学生と個人的につながりをつくるというよりも、小学校ってこんなところなんだとか、小学生になるってこんなことなんだというのがわかるという機会が多くて、私立の幼稚園は実はその枠からはみ出ている存在だと、自分たちでは認識をしているところ。

○大方委員長 つないでもらいにくいと。

○ト田委員 私が働いていた幼稚園も、毎年三十何人しか卒園させていない割には、幼稚園児、行く先の小学校が20超えるんです。だから、交流もへったくれもない。場合によったら、電車に乗って15分とかいうところに通ったりする場合もあるので、そうすると、小学校に対するイメージづくりができないですね、我々も。そこが実は公立の場合は、近くにあつて、しゅつと行ったら行けるから、小学生ってこういう人たちなんだとか、6年生でおっさんに見えるけど子どもなんだとか、いろんなことがわかっていくわけですよ。そういうことが、むしろ公立幼稚園の売りとして立てていけるのではないかという気がするんです。

○中谷委員 それは私たちももう今まで1校1園だったので、就学する小学校に全部が行

くと思っていたんですけど、加茂幼稚園は3園、3校区の子どもが集まっているので、やっぱりその辺、私たちが考えを切りかえて、小学生とはどんな、先ほどおっしゃったようなことで、していかないといけないなと思っているんですけども、保護者はなかなかそう思わないんです。だから、その辺、小学校の運動会のことを例にとりますと、小学校は全部同じ日に運動会があるんです。加茂幼稚園は加茂小学校へ上がる子どもも多いですし、加茂小学校区なので、必然的にそこへ参加するんです。そしたら、ほかの清高小学校やら取石小学校には参加しないんです。そしたら、その保護者が、どうして行かないんだという、そういう気持ちも、だから今度統廃合してなると、そういう問題もやっぱりいっぱい出てくるので、私たちはどういうふうに保護者にわかっていただくのか、考えていかないといけないというそういうデメリットがあるんです。なかなか保護者の気持ちというものは割り切れないところがあるので。

○大方委員長 いろんな、今ちょっとビジョンも出てきたところなんですけれども、8時になったので、次回、一応報告書として出すということなんでございますが、一応今まで出そろっているところで見れば、中学校区というのは前回から出ているところではあるんですけども、中学校区に1つということで、基本として5園を3園のほうに統廃合していくという見通しですよ。見通しとしては考えられるのではないかとということと、それから高南中学校の中では、全体的な評価としては高石幼稚園の評価が非常に低く、合計しても23人ですね。複数学級にはなかなかかなりにくい。ということもあって高石幼稚園のほうを統廃合する。来年募集停止ということが考えられるのではないかとということです。ただし、説明ということを保護者のほうに説明をしていただくということでない、ある日なくなりましたではいけないので、24年度4歳児の募集については、これを行わないということで、この委員会としたら提案せざるを得ないのかなと思いますが、保護者の説明等周知徹底していただきたいということは申し上げておきます。

それから、結果的には廃園するというところにいずれなるわけですけど、5歳児、進級する園児たちに関しましては、2通りあると。このまま5歳児として残るとということと、それから高陽さんのほうに統廃合するという2通りが考えられて、教育的配慮、集団力ということから考えれば、統廃合が望ましいということはあるんですけども、保護者の気持ち等ございますので、その辺は慎重に取り扱っていただきたいと。ただし、11名ということに仮になった場合には、集団力と教育的配慮によって、保育の内容等を創意工夫するという視点に立ってもらわないと、11名で保育をするということは、限りなく子どもにとって

いいものとも言えないところもあって、保護者の気持ちということと、子ども自身の育ちの保障ということと両方の視点で、私たちとしたら提案するということになるのかなと思います。

それから、加茂幼稚園さんに関してはもうこのまま、差し当たって問題はないかと思うんですが、高石中学校区の羽衣、北ですね。北幼稚園に関しては、園児に関しては羽衣さんと変わらないですが、就園率のことを見たときに、羽衣のほうが高いと。北のほうが、就園率が低い状態であると。さらに小学校と隣接しているということで、安心・安全ということ、そして連携の可能性ということを考えてときに、羽衣幼稚園のほうがより多角的、総合的に判断したときには羽衣幼稚園のほうが望ましいのではないかと。ただし、現在在園している子どもさんの数はほぼ同数なので、再編の時期ということに関しては、新システムを見据えて決めていただきたいというふうなことを思います。

という感じでしょうかね。白黒つけますか。

○ト田委員 北幼稚園に関しては、就園率も羽衣と比べてもかなり低いですが、実は全体で考えると、上から2番目なんですよね。だからちょっと、すごく取り扱いが難しいですよね、ここは。逆に、高石市として中学校区に1園というところのビジョンがしっかりと打ち出せた上でないと、それもすぐにできるかどうかという、非常に微妙な気がするんです。

○大方委員長 白黒つけるんならそういうことになる。高陽、羽衣、加茂みたいな形になるんですけど、ややちょっと段階的なふうに。新システムがなければ、ここで決めるということもあるんでしょうけど、もう間近に迫っているならば、やや性急かなという気がするので、そこら辺を見据えて、そうするとこの保育所のどこからどこにあるかとかいうことによって、また意味が違ってくるんですよね。両方とも子ども園ということになってくるので、やや緩やかな再編計画でもいいのかなという気がしますけど。

白黒つけるなら、何ぼでもやらなきゃいけないんですけど、校長先生、どうですか。

○西條委員 僕らが今まで話し合った中で、やっぱり最終的にはいろいろ考えて、中学校区1園というのが、原則かなというところやけども、それに対するプロセス、し過ぎというところからは、それはやっぱりこうなっているところからはちょっとぼやかしておいても、僕らの意見としてはええかなという気はします。

○大方委員長 この委員会がどこまで決定権があるという、そこまで決定権はないので、時期まで決めるようなところではないので、だから、今校長先生にまとめていただいたよ

うに、中学校区に1つというのが原則やと思うんです。それは何もスクラップするんじゃないで、子どもの集団力と小学校に行ってから集団力というのを考えたときに、少なければいいというわけではなく、決してそれは公立幼稚園が悪いということではなくて、やっぱり今の時代の子どもの育ちを考えたときに、集団は必要であろうということが言えるわけです。

その中で就園率を見たときに、羽衣さんは非常に高いということがあって、ほかのところはややしんどくなってきているのかなという、これが来年、再来年と、もっとぐっぐつと狭まってくる可能性もありますし、もしかしたら伸びていくということも、高石がなくなった分、この子たちが移動した分ということなんですけど、この人数からいって、高石がなくなって、すごくよそがふえるということは余り考えにくい、高陽がすごくよくなりましたということにもなりにくいかなと思うんです。校区に1つじゃなかったら、高陽と高石がどっちもしんどくて、数字は余り高くないですけど。副委員長はどうですか。

○菊野委員 それは決定でいいと思います。

○大方委員長 一応、再編委員会なので、教育的配慮としても5園を3園にという方向性、方向性を示すということですね。

高石に関しては、来年の募集停止ということが見込まれるわけですが、それに対して保護者に説明等をやっていたきたいということです。残る5歳児に関しては、統廃合も含めて幾つかの案が考えられるので、より慎重にしていきたいと思いますが、11名で残るとということが必ずしも望ましいというわけでもないので、創意工夫をしていただくということはあると思います。

羽衣、北に関しては何回も言いますが、羽衣の就園率が非常に高いので、このままいけば就園率の高さが羽衣に見込まれると。ただ、今の園児数は同数ということもあるんで、次の新システムを見据えた計画ということでお考えいただきたいと思います。中学校区に1つということを決定的に教育委員会なり高石市として決めた上でどこということならば、高石と北ということが上がってはくるんですけども、今そこはちょっとビジョンとして明確ではないので、それに合わせて再編計画というものをお考えいただければいいのかなと思います。

それから、3歳児と預かり保育に関しましては、前回も出ていますように、是非お願いをしたいということで、ただし来年の春はちょっと間に合わないかもしれないですけども、3歳児預かりをお願いしたいということで、新システムを見据えて、そういったことも考

えいただけたらと思います。

これは提案ですけれども、幼稚園におかれましては、今の保育教室の部分で子育て支援として、可能ならば模索されるほうがいいと。募集ということはできない。議会も通っていないので間に合わない。そのぐらいですか。

今回は、報告書という形で私のほうでまとめさせていただいて、出さなければいけないんですけれども、何か皆さんの意見があれば。

○西條委員 ちょっと教えて。報告書という形は、当然そこは公開になる。

○大方委員長 もちろん公開です。今回までは非公開で来ましたけれども当然公開。当然公開です。

何かありますか。事務局のほう何かございますでしょうか。ちょっとそれは困るとか。緩やか過ぎるとか、もうちょっとちゃんとこの委員会として決めてほしいとか。

今の意見で、ここに皆さんのほうの、できれば段階的にという希望はあるでしょうけども、だからといって北と高石があって、いい数字だとも思われていないと思うので、決めろと言われたら決めれなくはないですが。

○事務局 委員の皆さんのご提言ということで。

○大方委員長 よろしいですか。そのほうが来られている園長先生と保護者の方はやや気持ち楽かな。羽衣は、羽衣の保護者が出たから残ったでしょうみたいなのがあったら嫌ですもんね。数字が出ているのに、そういう面で評価があるほうが説明しやすいんじゃないかと。参加している園だけが残りましたという形になると、ほかのなくなる園にいる先生も保護者も説明しにくいと思うんです。一応数値化しているので客観的な指標でもって残ることが報告書として出たほうが言いやすいんじゃないかなと。特に羽衣と北は接戦しているところもあるので、ここで羽衣残します北は閉めますって、順序的にいえば羽衣ということは書きたいと思っているんですけども。余り言うちょっとしんどくなる気がするから。よろしいですか。

そしたら、来週報告書を今のご意見に基づいて作成し、事務局のほうにご提出させてもらおうということでよろしいですか。それで公開をしますので、傍聴の方ももちろん来ていただくと。

そういうことで、気分がトーンダウンしないように、園長先生ビジョンをよろしく願いますね。さっき校長先生がおっしゃった。気分はトーンダウンではなくビジョンを持って、さらに再編が再編にならないように、いい形で来年の春を迎えるように、園長会で

夢を語るなどやっていただいて。どうしたら園児が来るだろうというような、募集計画案を策定していただきたいと思います。